

## D.W.ウィニコットの情緒発達理論に関する一考察

－保育における養護との関連に着目して－

### A Study of the Theory of Emotional Development by Winnicott, D.W.

－Focusing on the Relationship with Nursing Care in Childcare－

高橋 千香子

Chikako TAKAHASHI

#### 要旨

本稿では、保育所保育指針に示されている養護における保育者の関わりについて理解を深めるため、D.W.ウィニコットの情緒発達理論に関する論文を3編取り上げ、検討を試みた。ウィニコットは、子どもと母親の関係性の視点による情緒発達や治療論について有用な論考を残している。最初に取り上げた論文「精神病と子どもの世話(1952)」は、環境としての母親が乳児のニーズに積極的に適応することで、乳児は自己感覚 sense of self を失うことなく主体性を発揮できる一方、環境が誤った適応をすると侵襲 impingement となり、将来の精神病性不安につながる可能性があるとし唆している。次の「親と幼児の関係に関する理論(1960)」という論文では、ウィニコット理論の重要な概念である「抱っこ holding」について論じられており、抱っこの目的は環境からの侵襲を最小限にして破滅 Annihilation を防ぐことであるとしている。最後の論文「小児発達における母親と家族の鏡としての役割(1967)」は、乳児が母親の表情を見る時、そこに自分自身の気分や表情を見ているのであるが、母親が乳児の鏡になれない時、乳児は母親自身の顔を見ることになり、母親の顔色を伺う能力を習得してしまうと述べている。いずれの論文も、人的環境である保育者の援助や関わりを考える上で示唆に富むものである。

キーワード：ウィニコット、保育における養護、応答的な関わり、抱っこ holding

#### I. はじめに

2019年告示の保育所保育指針（以下、指針とする）において、「養護に関する基本事項」が示され、保育における最も大切な原理・原則として「養護」が位置づけられた。指針には、「養護の理念」として次のように記されている。「子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものである。保育所における保育全体を通して、養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されなければならない<sup>1)</sup>。1日の多くの時間を家庭から離れ、保育所で過ごす子どもたちにとって、安全や安心が担保された環境で、生命や健康に配慮されて過ごすことが重要なのは言うまでもないであろう。また、養護と教育の一体性については、「保育士等が子どもを一人の人間として尊重し、その命を守り、情緒の安定を図りつつ、乳幼児期にふさわしい経験が積み重ねられていくよう丁寧に援助することを指す」と解説書に示されている。さらに「乳幼児期の発達の特性を踏まえて養護と教育が一体的に展開され、保育の内容が豊かに繰り広げられていくためには、子どもの傍らに在る保育士等が子どもの心を受け止め、応答的

なやり取りを重ねながら、子どもの育ちを見通し援助していくことが大切である。このような保育士等の援助や関わりにより、子どもはありのままの自分を受け止めてもらえることの心地よさを味わい、保育士等への信頼を拠りどころとして、心の土台となる個性豊かな自我を形成していく。」と記されている<sup>1)</sup>。

乳幼児期、とりわけ0～2歳児は、母親をはじめとする養育者との愛着関係を通して心身の基礎が形成される極めて重要な時期であり、保育者はそのことを深く理解して保育を行っていく必要がある。では、保育において「子どもの心を受け止め、応答的なやり取りを重ねながら、子どもの育ちを見通し援助していく」とはどのようなプロセスであり、なぜそのような関わりが必要なのだろうか。本稿では、D.W.ウィニコットの情緒発達理論を検討することを通して、保育者による応答的な関わりとの関連を検討するとともに、子どもが適切な関わりを得られない場合、子どもの心に生じる精神的トラブルとはどのようなものなのか、示唆を得ることを目的とする。

## II. D.W.ウィニコット博士について

D.W.ウィニコット（1896～1971）は、イギリスの小児科医であり、精神科医、精神分析家でもある。ウィニコットは小児科医として、生涯で約6万例を超える子どもを診察したといわれており、乳児期の子どもと母親のあいだをつぶさに観察し、発達早期の情緒発達の重要性に着目して、母子関係の視点からの情緒発達理論を唱えた。実践家としては、子どもの心理治療や保護者へのコンサルテーションをはじめ、精神分析家として成人の精神分析も行っており、世界的に影響のある有用な治療論を数多く残している。日本では、1970年代の後半頃より牛島、橋本、北山らによって論文集が翻訳され<sup>2) 3) 4) 5)</sup>、北山、川上、館などによってウィニコットの理論研究がすすめられてきている<sup>6) 7) 8)</sup>。

ウィニコットの有名な言葉に、「一人の乳児（赤ちゃん）というものはいない There is no such thing as an infant」というものがある。乳児と母親を個別の存在としてではなく「つがい set-up」としてとらえ、乳児のそばには必ず母親がいること、そこから一人の人格として発達していく過程について、子どもの主観的体験から、母親（養育者）の側から、そして相互の関係性や空間 potential space といった視点から重層的に論じているところにウィニコット理論の特徴がある。また、乳児が母親から「離乳」していく時に出現する「移行対象」または「移行現象」についての理論や、「遊ぶこと」の治療論も有名である。なお、ウィニコットと同じように早期の母子関係に着目し、アタッチメント理論を提唱したJ.ボウルビィは、ウィニコットとほぼ同時代を生き、両者ともに第二次世界大戦中の英国における子どもの精神保健活動に携わり、戦後の「児童憲章」の制定に影響を及ぼす提言を行っている。また、両者とも精神分析家になるためのトレーニングを受けている点も共通しているが、ボウルビィは、戦後、ローレンツなどの動物行動学者の理論に触れ、直接観察などに基づき、アタッチメントという実証可能な理論を展開していくこととなった<sup>9)</sup>。

このように、ウィニコットは子どもの情緒発達と早期の母子関係の関連に着目し、数多くの論考を残しているが、いくつかの論文において「母子関係について考えることは、精神分析医として患者との治療関係を捉える際に有効である」という旨を述べている。保育についても同等またはそれ以上に役に立つと筆者は考えている。そこで、ウィニコットの情緒発達理論に関する論文の中で、主要な3つの論文を取り上げ、若干の考察を加えたい。なお、ウィニコットの論文における「infant」の訳語については、訳者や時期によって「赤ちゃん」「赤ん坊」「幼児」「乳児」とさまざまに訳されているが、本稿では基本的に「乳児」に統一して記す。

### Ⅲ.「精神病と子どもの世話」(1952 年)

この論文<sup>5)</sup>は、子どもの精神病について、早期の環境側の失敗によって引き起こされる場合があるという主旨のもと、そのメカニズムについて母子関係の視点から述べたものである。ウィニコットの情緒発達に関する総論的な論文は、1945 年の「原初の情緒発達」<sup>4)</sup>が初めてであるが、本論文はそれをさらに推敲した内容になっている。ウィニコットの研究者である J.エイブラム (2020) は、本論文について「2つの早期対象関係のパターン、抱えられた赤ちゃんを抱えられなかった赤ちゃんという2人のウィニコットの赤ちゃんについて一連の図式化をし、環境・個人の組み合わせ論について述べている」と説明している<sup>10)</sup>。ここでいう「抱える holding」(以降は「抱っこ」と記す<sup>注1)</sup>)という概念は、ウィニコットの鍵概念のひとつであり、IVで取り上げる論文に詳しく記されている。本論文は、子どもの自己感覚 sense of self と環境の侵襲 impingement という観点から、子どもの最初の主体性なるものについて興味深い示唆が得られると筆者は考えている。今回は、その箇所について書かれている論文の前半部分を中心に紹介する。

まず論文の冒頭、ウィニコットは、母親というものは必然的に子どもの世話に没頭するものであり、それが重要なことであるということを以下のように述べている。

個々の子どもの精神的健康は、母親が自分の子の世話に没頭している間に、母親によってその基礎が築かれる。献身 devotion とは、感傷的なものではなく本質的な姿勢、すなわち乳児のニーズへの感受性豊かで積極的な適応 sensitive and active adaptation である。そのニーズとは最初は絶対的なものであり、母親は決して利口である必要はない。(pp.93-94)

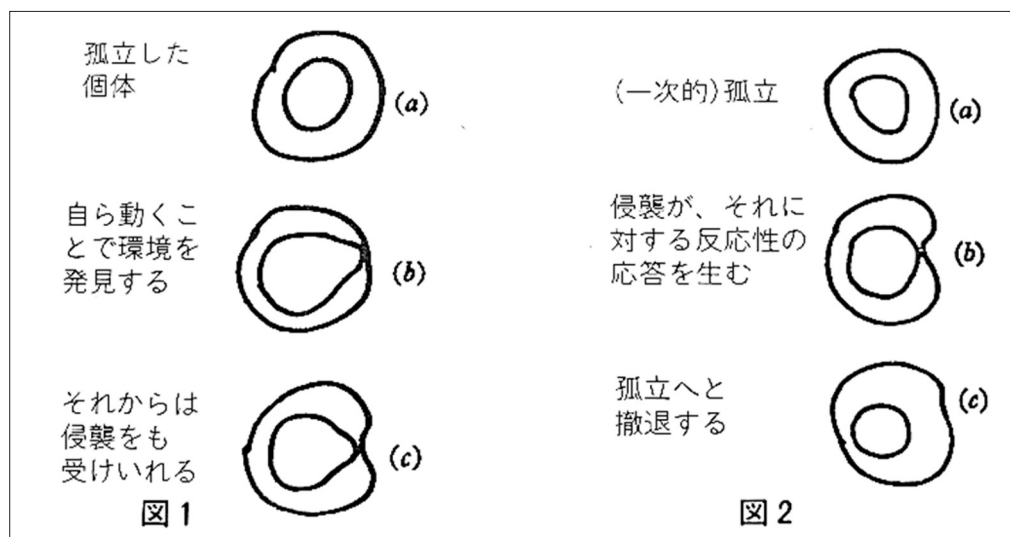
ウィニコットは 1956 年の「原初の母性的没頭」<sup>5)</sup>という論文において、出産後の母親の感受性の高まった状態について詳しく論じている。それは「妊娠の間、そして妊娠の終わりに向かってだんだんと発達し、感受性の高まった状態に陥る。それは子どもの誕生後数週の間続く状態」であり、普通に健康な母親であれば、「この狂気にも近い感受性の高まった状態」に達することで、わが子のニーズに応じることができるという。さらに、「母親が一度その状態から回復すると、彼女がそれを思い出すのは簡単なことではない。…(略)…母親がこの状態について持っている記憶は抑圧される傾向にある」と述べており、いずれこの献身的な没頭の状態から回復し、回復過程を通して、母子の一体化した状態から、「自我による関わり ego-relatedness へと変容していく」と述べている。そして、この最初の没頭が難しい場合に、子どもの心に深刻な状態を引き起こす可能性があるという。

次にウィニコットは、情緒発達の原初の段階について「非常に難しい主題だ」としながらも、次のように述べている。

最初は、個体は決して1つの単位 unit ではない。外側から見る限り、1つの単位になっているのは環境－個体の組み合わせ environment-individual set-up なのである。外部の観察者は、個体の精神とは特定の設定 setting があってはじめて開始されるものだということを知る。(p.96)

この最早期の段階の乳児と母親は、「つがい set-up」の状態であり、乳児単体の「心 mind」は「無い」状態であるということである。そしてウィニコットは、「これはとても危うい時期であり、ここからいかに依存そして自立へと移行する段階に達することができるか、それに成功することが精神病の点から見た精神的健康を基礎づけることになる」と述べ、この段階における個体と環境の関係とその影響について、図式化して示している。

注1 holding は、「抱えること」または「抱っこ」のいずれかで訳されている。心理療法の観点から「抱えること」と訳されていることが多いが、本稿は保育に関連しているため、「抱っこ holding」と記載する。



D.W.ウィニコット北山修監訳「児童分析から精神分析へ」p97より引用

- 図1 環境は子どものニーズに積極的な適応を行い、子どもは邪魔されることのない孤立 *isolation* の状態でいられる。乳児自身はその事情を知らない。乳児は自発的に動き、その自己感覚 *sense of self* を失うことなく環境を発見していく。
- 図2 環境は子どもに対して誤った適応をしたために、結果として環境の侵襲 *impingement* となってしまう、子どもはこの侵襲に反応する存在とならざるを得ない。この状況では、自己感覚は失われてしまい、孤立へと撤退することではしかそれを取り戻すことはできない。

ウィニコットによると、図2の体験は、環境一個体の組み合わせの精神病的な歪みを引き起こし、関係をもつこととそのものが自己感覚の喪失を生み出してしまおうという。そして子どもが「防衛的な組織」を備えれば備えるほど、「孤立が純粋なものではなくなっていく」。すなわち、ウィニコットのいう「偽りの自己 *false self*」の部分が大きくなっていくと述べている。

筆者はここに、保育者による応答の関わりの基本があると考え。まず最初に乳児が環境を発見することが大事であり、それが子どもの主体性の基盤となる。乳児はなぜ環境を発見できるのかというと、環境側が感受性を高め、子どものニーズに同一化し、積極的に適応するからである。ここで環境が侵襲的であってはならないとウィニコットはいうのであるが、乳児が先か環境が先か、よく考えると非常に難しいことであるが、一般的な母親が普通に行っていることなのである。侵襲的な環境とは、大人の都合や欲求を優先する養育や、産後うつなど、養育者が乳児の求めを敏感に感知できない状態が含まれると考えられる。昨今、一見社会に適応しているように見えるが、「生きている実感がない」「生きている意味が分からない」といった空虚感や絶望感に近い感覚を抱いている若者が増えている。彼らの中には、幼い頃、何らかの事情で抱える環境が得られず、「偽りの自己」によって対処してきた者がいるのかもしれない。ウィニコットは、本論文の中で「そのような障害に対する治療は、子どもに積極的に適応し、諸過程に対する敬意を徐々に築きあげていかねばならない」と述べている。この一文だけでは具体的な関わりをイメージしづらいが、保育者は、自身の思い込みを排し、まず子どもの内面に同一化し、ニーズすなわち子どもが真に必要としていることを察知し、対応することが求められているといえるだろう。

本論文の後半は、環境一個体の組み合わせから、徐々に外に出て、子どもの人格がまとまり、統合していくプロセスと、その過程における危険性について記されているが、本稿での引用はここまでとする。

#### IV. 「親と幼児の関係に関する理論」(1960年)

この論文<sup>2)</sup>は、ウィニコットの有名な言葉である「一人の赤ん坊というものはいない」について言及されている。



また、ウィニコットの理論において中心的概念である「抱っこ holding」について詳細に記されている論文であり、館（2013）によるとウィニコットの早期発達理論の全体像が述べられている<sup>8)</sup>。

冒頭部分では、フロイトの創始した精神分析の解釈中心の治療技法に対して、母子が一体となった時期の外傷的体験の治療では技法の修正が必要になるとの提言を述べており、重要な部分でもあるが、本稿ではその部分には詳しく触れず、早期発達理論にすすみたい。

まず、この論文における幼児 infant とは、非常に幼い子どもを呼ぶのに用いるとし、「infant という言葉には“話さない” infans という意味がある。…乳児期は、言語的に表現され、またはされうるものに対する理解にもとづいてなされる育児よりも、母性的共感にもとづいてなされる育児の時期といえる」としている。詳しい年齢は書かれていないが、おそらく0歳から3歳ぐらいまでの子どもを想定していると考えられる。

#### A. 乳児

ウィニコットは、「人間の乳児はある種の条件下でないと存在しはじめることはできない」と述べる。そして、乳児には「潜在力」が備わっており、それは「生得的なもの」で、「成長と発達への傾向が含まれている」という。そして、「この乳児の潜在力は、母親による育児と結びついたものとならない限り乳児そのものにならない（太字は原文のまま）」。つまり、母親との「関係」なしには乳児は存在し得ない。そして、乳児の生得的な潜在力 Inherited potential を発達させる育児は、次の3つの段階に分けることができると述べている。

- a) 抱っこ holding
- b) 母親と幼児がともに生きること Living with
- c) 父親、母親、幼児の三者がともに生きること

ここで、a) 抱っこ holding について、ウィニコットは、「実際に身体を抱くことを意味するだけでなく、“共に生きる”という概念ができあがる以前に環境から与えられるすべての供給を意味する」と説明する。抱っこ holding の時期は、「自我は未統合な状態から構造化された統合へと変革をとげ、乳児は人格解体に伴う不安を体験できる」ようになり、健康な情緒発達の結果として、ひとりの個人としての人間になるという。ウィニコットは、この段階を「精神が身体に棲みつく」と表現する。「棲みつくことの基盤は、運動や感覚や機能的体験と、一人の人間になったという乳児の新しい状態との結合にある」。さらに発達がすすむと「自分」と「自分でないもの」のあいだに境界膜と呼べるものが生まれ、乳児は「内側」と「外側」、つまり「身体図式」をもち始め、独自の内的な心的現実があると仮定できるようになる。そして館（2013）の説明によると「その他の精神活動、そのうちでもっとも重要な知性の夜明けと心の始まりが起き、引き続いて二次過程、象徴機能、その子ども独自の精神内界が生まれてくる」<sup>8)</sup>。それと同時に、攻撃性や性愛への衝動、対象関係を作る能力が発達していくということであるが、こうした情緒発達は、適切な抱っこがないと達成されないとウィニコットは述べる。

続いてウィニコットは、依存 dependence について言及する。「抱っこの時期は、乳児は最高に依存的である」として、絶対的依存、相対的依存、独立への方向の3段階に分類している。絶対的依存にある乳児は、養育について知るすべがなく、コントロールもできないため、ただ利益を得るか害を受けるかであるという。次に相対的依存にある乳児は、養育でどうしてもらいたいかを自分で知るようになり、自分の衝動と結びつけることができるようになる。そして、独立への方向では、環境への信頼が増し、養育がなくてもやっていける能力を発達させているという。ウィニコットはここにおいても子どもの年齢について言及していないが、最終の段階は、おおよ3歳くらいを想定していると考えられる。

そして、「この時期に起こることで考えなければならない現象は、人格の中核部分、つまり中核的または本当の

自己が隠されることである」とし、「中核的自己は、存在の連続性 continuity of being を体験する生得的な潜在力」であり、それが分立すること isolation が健康の指標であるという。しかし養育側の失敗による侵襲が、この中核的自己に影響を及ぼしたときの揺さぶりが、精神病的不安の本質であるという。この部分の論考は、前出の「精神病と子どもの世話」で論じられていることと重なるところである。一方ここでは「健康な場合は、偽りの自己が組織化されることにより、しだいに傷を負わなくなり、中核的自己は守られる」と述べており、「偽りの自己」の適応的な側面について言及している。

また、この時期は「死の恐怖」を感じる以前であり、「存在の連続性」の中断とは「破滅 annihilation」であり、抱っこの主な目的は、侵襲を最小限にして、破滅を防ぐことであると述べている。なお、ウィニコットは、さまざまな論文の中で、環境としての育児は失敗するものであり、子どものニーズに完璧に応じる育児はむしろ有害であり、ほどよい good enough 育児が子どもにとってもっとも良い育児であると述べている。

## B. 母親による養育の役割

次にウィニコットは、母親（養育者）の側からの視点で、「抱っこ holding という概念は重要なので、この論文ではさらに発展させたい」とし、論を展開する。

### 抱っこ

物理的な侵害からの保護。乳児の皮膚の感受性—触覚・温覚・聴覚の感受性、視覚の感受性、落下に対する感受性（重力の感覚）と、乳児が自己以外のものの存在を知らないことへの配慮。それは昼夜を通してなされる日常の世話全体を含む。抱っこの一部は乳児が演じるわけだが、2人の乳児が全く同じということはありませんので、いかなる乳児2人を比べても、抱っこは同じということはない。また、抱っこは、乳児の身体的心理的成長に伴い、日々刻々と変化していく。（p.47）

「抱っこは乳児の身体を抱くという意味であるが、これはひとつの愛情表現である。おそらく母親が乳児に愛情を示してやれる唯一ひとつの方法といえよう。乳児を抱っこできる人もいれば、できない人もいる。できない人は乳児の中に不安定感をつくり出しやすく、そのためにおこる泣き声に悩まされることになる。（p.48）

さらにウィニコットは、「実例を示して育児のこつを説明する」述べつつ、次のように説明する。

乳児は母親と合体（融合）している。…この合体（融合）に終わりがくると変化が起こる。この終わりは必ずしも徐々におこるわけではない。乳児の目から見て、母親と乳児が分離するとすぐに、母親が態度を変えようとするのは注目に値する。乳児がもはや自分の欲求を魔術的に理解してもらえる状況を期待していないことを、母親が気づいているかのように見えるのである。母親は乳児の欲求を満たすには、乳児からの「信号」に従えばよいようになる。母親が乳児のニーズを分かりすぎると、魔術的となり、乳児の対象関係の基礎を損なうことになる。…子どもが環境から独立するような、融合（合体）の終わりの局面で大事なことは、乳児は信号をおくらなければならないということである。（p.49）

乳児からの信号とは、創造的身振り、泣き声、抗議などであるが、一部の母親は見過ごしてしまい、子どもがまだ融合しているかのように欲求を満たしてしまう。それはつまり母親の側が乳児に融合してしまっている状態であるという。これは「見せかけの良い母親」であり、このような母親に育てられる子どもは、母親との融合を永遠に続かせるか、そのような母親を全面的に拒否する態度を取り続けるかの二択しかないという。この時期の乳児は、「ひとつの状態と別の状態とのあいだを行き来するため、母親にとって極めて難しいこととなる」が、一般的な母親は、我が子のこうした微妙な変化に気づいて対応できると述べている。つまり、育児が上手くいっている場合、

乳児からすると、何が適切に供給され、何が避けられたのかについて知るすべはなく、むしろ上手く運ばなかった時に知ることになるという。「そこで乳児が知るのは、上手くいかなかったことではなく、失敗の結果である侵襲に反応していることを知る」。育児が上手くいっている時は、乳児の中に自我の強さの基盤となる存在の連続性が形成されるのに対し、そうでない場合は、自我は脆弱となる ego-weakening と述べている。

最後にウィニコットは、Ⅲの論文でも述べている母親の原初の没頭について、それはほとんど身体的なもので、子宮のなかに赤ちゃんの身体を抱っこしたときに始まるが、「心理的な側面も影響するため、母性本能という言葉だけで説明するには不十分である」と述べる。母親は自己感覚の一部を乳児に移し、何らかのかたちで乳児に同一化する。同一化なくして乳児の求めるものを与えることはできず、同一化を通して与えることが乳児の欲求に対する生きた適応であり、その中心が抱っこなのであると結論づけている。

以上が論文の内容であるが、川上（2012）はウィニコットの抱っこ holding の概念について、「彼はこの中でも微妙な関わり合いのもつ意味を明らかにしようとしているのである。つまり彼が holding ということで示そうとしたのは、母親が自分の意思に従って子どもを抱っこするなどといったことではなくて、子どもと母親との間に holding という関係性が成立するということが何はともあれ肝要であって、母親がどのように抱っこし、子どもがどのように抱っこされるかということは逆に関係性の原理に基づいて実践されてこそ、はじめて意味あるものになる」と述べている<sup>7)</sup>。意思や理屈を超えたところで、乳児と母親はつながっているはずなのである。ウィニコットのいう抱っこ holding の時期の母子に関わる保育者は、それが上手く運んでいるか見守ること、そして、保育において子どもの存在の連続性が守れるよう、母親をはじめとする保護者と協力し、抱っこの環境を整えることが重要であるといえる。さらに、抱っこの終わりの時についての感受性も必要とされるだろう。

## V. 「小児発達における母親と家族の鏡としての役割」（1967 年）

最後に取り上げるこの論文<sup>3)</sup>は、ウィニコットの比較的晩年に書かれたものである。K.ライト（2001）は、「この論文でウィニコットは自らの関心を乳房から母親の顔に対する乳児の相互作用に移した」と述べ、社会的コミュニケーションの領域を発達の中心に据えたという点で重要であると評価している<sup>11)</sup>。

ウィニコットは「乳児が母親の顔を覗き込む時、そこに何をみているだろうか」と問いかける。そして、「乳児はそこに自分自身を見ているのではないだろうか。別の言い方をすれば、母親が乳児を見つめ、その母親の様子が、そこで母親が見ているものと関連している。」つまり、まだ自己が確立する以前の乳児が、母親の顔を見ている時というのは、母親の表情を見ているわけではなく、母親の表情を通して自分を見ている。すなわち母親の表情は、乳児にとっては自分の気分や表情を表す鏡のようなものであると述べている。ライトはこれについて「母親の応答は乳児の情動的自己の一部としてみなされている…母親が乳児の感情をそのまま反復的に応答することによって、乳児の感情は現実化され、高められる。ここから、人の経験が完全に現実のものとして体験されるためには、他者によってとらえられ、映し出されることを必要とするとの考えと類似する」と述べ、応答的な関わりの重要性を指摘している。

一方で、母親の不機嫌さや防衛の固さから、乳児の鏡になれない時、乳児は何をみるのかというと、ウィニコットは、乳児は自分自身ではなく母親自身の顔を見ることになるという。もちろん、それはたった1回反応ができなかっただけで生じるわけではないが、「多くの乳児は、実際に自分が与えているものを取り戻せないという経験に、長期に渡って耐えなければならない。乳児はまなざしを向けるが、自分自身を見ることはできない。その結果、乳児自身の創造的な力は委縮を始め、あらゆる方法を用いて環境から自分自身の何かを取り戻す方法を探し求める」。そして、天気予報のように母親の顔つきを予想する能力を習得してしまい、母親の顔が曇り始めると、「自分自身

の中心的な自己が傷つかないように、自分自身の欲求を控えることを学んでしまう。それが行き過ぎると、カオスへの前兆となり、心の内部に防衛としてのひきこもりを組織化するか、知覚の目的以外にまなざしを向けることはなくなる」と述べている。

次にウィニコットは、慢性的なうつ状態のある女性が、毎朝絶望的な気持ちで起床するが、顔を洗って着替えをすることで気持ちを立て直していたという例を挙げ、「その女性は、鏡を見ることで、自分自身の母親にならなければならなかった」と述べる。そして次のようにいう。

私がまなざしを向ける時、私は見られている、それゆえに、私が存在する。

今、私はまなざしを向けることも、見ることもできる。

今、私は創造的にまなざしを向け、さらに私は私が意識的に知覚（統覚）したものを知覚する。(p.161)

この論文は、母親や保育者は、乳児の欲求やニーズだけでなく、乳児のまなざしや表情を受け止めることの重要性を示唆している。保育者は、乳児のまなざしや表情を受け止める時、その乳児の思いや情動に同一化し、反応する。それが乳児の自己感覚を育む重要な応答的関わりなのである。昨今、家庭ではスマートフォンの画面を見つめる時間が増え、新型コロナウイルスの感染防止のためのマスク着用により、家庭だけでなく保育施設においても、子どものまなざしや表情を受け止める関わりの時間は確実に減少している。それが子どもの情緒発達にどのような影響を及ぼしているか、注視していく必要があるだろう。

## VI. 終わりに

ウィニコットの情緒発達に関する主要論文を通して、人的環境である保育者の応答的関わりの意味や重要性について検討した。子どもの精神的健康の基盤を育むためには、抱っこ holding が不可欠であり、保育者は、母子の関係性を見守るとともに、母親をはじめとする保護者と協力し、子どもの存在の連続性を守る環境をつくることが重要である。

本稿では、抱っこ holding の時期について中心に取り上げたが、抱っこから「共に生きる」段階へと移行する時期の母子関係および情緒発達について書かれた論文も多数あり、保育を考える上で大変興味深く、有用であると考えている。次の機会に取り上げ、検討したい。

## 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省編 (2018) 『保育所保育指針解説』 フレーベル館
- 2) D.W.ウィニコット (1977) 『情緒発達の精神分析理論－自我の芽生えと母なるもの－』 牛島定信訳 岩崎学術出版社
- 3) D.W.ウィニコット (1979) 『遊ぶことと現実』 橋本雅雄訳 岩崎学術出版社
- 4) D.W.ウィニコット (1989) 『小児医学から児童分析へーウィニコット臨床論文集Ⅰ』 北山修監訳 岩崎学術出版社.
- 5) D.W.ウィニコット (1990) 『児童分析から精神分析へーウィニコット臨床論文集Ⅱ』 北山修監訳 岩崎学術出版社
- 6) 北山修 (2004) 『改訂 錯覚と脱錯覚』 岩崎学術出版社
- 7) 川上範夫 (2012) 『ウィニコットがひらく豊かな心理臨床－「ほどよい」関係性に基づく実践体験論』 明石書店



- 8) 館直彦 (2013) 『ウィニコットを学ぶー対話することと創造することー』 岩崎学術出版社
- 9) J.ボウルビィ (1991) 『母子関係の理論 I 愛着行動』 黒田実郎他訳 岩崎学術出版社
- 10) J.エイブラム・R.D.ヒンシェルウッド (2020) 『クラインとウィニコットー臨床パラダイムの比較と対話ー』  
木部則雄・井原成男監訳 岩崎学術出版社
- 11) K.ライト (2001) 「顔と表情ー乳児の鏡としての母親の顔」 J.ラファエル・レフ編 (2011) 『母子臨床の精神力  
動ー精神分析・発達心理学から子育て支援へー』 木部則雄監訳 岩崎学術出版社

